

## 196 気管支断端の閉鎖における器械縫合の安全性に関する検討

国療肺癌研究会

○本廣 昭, 廣田暢雄, 本間仗价, 林 浩二, 大内基史, 根本悦夫, 平岡靖典, 桑原 修, 菊地敬一, 堀内雅彦, 横山忠弘, 中野 昇, 養田節夫, 永瀬 厚, 上野陽一郎, 村上 勝, 小松彦太郎, 柳井 登

【目的】気管支断端の閉鎖における器械縫合の安全性と確実性は、未だ確立されていないと考えられる。器械縫合あるいは手縫いにより気管支断端の閉鎖が施行された症例の断端瘻の発生頻度を比較し、器械縫合の有用性を検討した。

【対象】国療肺癌研究会に所属する施設にアンケートを送付し、平成2年・3年・4年に肺癌に対して肺葉切除あるいは肺全摘が施行された症例を対象とした。

【結果】16施設から回答が得られた。3年間の全手術症例数は1221例で、肺葉切除が1052例、肺全摘が169例であった。断端の閉鎖方法は348例に器械縫合が、818例に手縫いによる縫合が施行されていた。全症例のなかで気管支断端瘻の発生が16例(1.3%)に認められ、肺葉切除で5例(0.5%)、肺全摘で11例(6.5%)であった。また断端瘻の発生は器械縫合の症例では11例(3.2%)、手縫いの症例では5例(0.6%)に認められた。

【まとめ】気管支断端瘻の発生は、手縫いより器械縫合による断端閉鎖のほうが頻度が高く、特に肺全摘例における器械縫合には注意が必要であると思われる。

## 198 Nd-YAGレーザーを使用した開胸術30症例の検討

天理よろづ相談所病院 胸部外科

○長澤みゆき, 黄 政龍, 神頭 徹, 北野司久

【目的】Nd-YAGレーザーを用いて開胸術を施行した症例の術後の空気漏れ・出血などを検討した。

【対象】開胸術時にNd-YAGレーザーを使用したのは30症例で、男性17例・女性13例である。平均年齢は56.9才である。組織学的には、原発性肺癌症例は11例であり、扁平上皮癌2例・腺癌7例・小細胞癌3例・カルチノイド2例である。転移性肺腫瘍は9例であり、良性肺腫瘍は6例である。

【使用法】術前に組織診断のついていないものは、病巣から1cmはなして接触型YAGレーザー15~20wattで肺部分切除を施行した。術中迅速病理検査で悪性所見が認められた症例は、肺機能的に可能であれば肺葉切除術を施行した。切除断端は、20wattでビーム照射を行い、フィブリン糊を塗布した。病巣が2cm以上の場合、縫縮を追加した。

【結果】術後のドレーン留置期間は、平均4.4日である。術中出血量は、肺葉切除を行った症例も含めると平均201.8gであったが、部分切除のみ行った症例の平均は86.6gであった。

【結論】肺手術におけるNd-YAGレーザーの使用は、出血・空気漏れなどの面から有用であると思われる。

## 197 肺癌に対する気管支形成術後の吻合部合併症対策

長崎大学第一外科

○中村昭博, 川原克信, 赤嶺晋治, 高橋孝郎, 辻 博治, 田川 泰, 綾部公認, 富田正雄

【目的】肺癌症例における気管支形成術後の吻合部合併症、及びその対策について検討したので報告する。

【対象】1969年から1991年までに sleeve lobectomy を施行した肺癌症例112例のうち、気管支及び血管吻合部合併症の発生した25例について検討した。

【結果】吻合部合併症は、気管支瘻6例(5.6%)、気管支-血管瘻2例(1.8%)、肺動脈閉塞2例(1.8%)、吻合部狭窄7例(6.3%)、局所再発8例(7.5%)が認められた。気管支瘻に対しては、大網被覆を併用した再吻合を施行した2例は良好に経過したが、片肺全摘を行った2例は呼吸不全で死亡した。気管-血管瘻の2例は突然の大出血で急死した。肺動脈閉塞の2例はいずれも肺動脈形成術が併用されていた症例で、片肺全摘を行ったが、呼吸不全死となった。吻合部狭窄に対しては、内視鏡的肉芽除去を4例に、癒痕性狭窄の2例には片肺全摘を行い、有効であった。吻合部局所再発には放射線療法を行い、全例で腫瘍の縮小あるいは消失を認め、6ヵ月から4年3ヵ月の生存が得られた。

【結論】気管支瘻に対しては大網被覆を併用した修復術を早急に行うべきである。吻合部の癒痕狭窄には片肺全摘が、肉芽種には内視鏡的除去あるいはレーザー焼灼が適応となる。吻合部局所の再発には放射線療法が有効だが、可能なら切除すべきである。

## 199

非小細胞性肺癌における接着分子の発現について

千葉大学医学部肺癌研究施設外科<sup>1</sup>, 同病理<sup>2</sup>, 同病理学第一<sup>3</sup>,

○小高恵美子<sup>1</sup>, 武内利直<sup>3</sup>, 馬場雅行<sup>1</sup>, 高野浩昌<sup>1</sup>, 野本靖史<sup>1</sup>, 山口 豊<sup>1</sup>, 大和田英美<sup>2</sup>, 三方淳男<sup>3</sup>,

【目的】肺癌組織における接着分子CD44, VLA $\beta$ 1, ICAMの発現を免疫組織化学的に検討し、臨床像との関連について解析したので報告する。

【対象・方法】原発性肺癌34例(腺癌16例, 扁平上皮癌18例)の凍結切片について、抗CD44抗体, 抗VLA $\beta$ 1抗体, 抗ICAM抗体を用いてABC法にて免疫組織化学的検討を行った。

【結果】扁平上皮癌の陽性率, 腺癌の陽性率はそれぞれCD44では78%, 63%, VLA $\beta$ 1では67%, 89%, またICAMでは10%, 69%であった。pT因子との関連をみると、腺癌においてpT1症例(n=5)のうち、CD44陽性は60%, pT2症例(n=5)では80%, pT3症例(n=3)では100%となり、接着分子の発現とpTの進展度に相関が認められた。pN因子との関連をみると、リンパ節転移のみられた症例(n=15)の2種類以上の接着分子の発現率は87%と、リンパ節転移のない症例(n=19)の37%を上回っていた(p<0.005)。

以上、非小細胞性肺癌における接着分子の発現とpN因子の進行度には関連が認められ、今後、肺癌における治療・予後の判定において解析していく価値があると思われる。